

書

評

庄司吉之助著

明治維新の経済構造

——第一部幕末における商品経済の発展と農民層の分化——

足立政男

庄司吉之助氏は頃日、「明治維新の経済構造」と題す大著を公にされ、その第一部において「幕末における商品経済の発展と農民層の分化」について実に克明な実証的研究の成果を発表された。この著者の研究論文は、現在筆者自身最も関心をもっており、かつ筆者の研究対象としている「近世在郷商人の存在形態の分析よりする農村経済の実体把握」に少なからぬ教示と、数多くの手がかりを与えて呉れたものの一文である。ここに本書よりうけた御教示に対する感謝をかねて不遜を憚らず紹介と書評をさせていた。ただき著者にその教ををう次第である。

著者はまず第一章において、「封建的土地所有の分解と地的土地集中」の論題のもとに、封建的土地所有の否定、殊に幕末において農民層がどのように分化していったかということについて、土地所有と経営規模との分布を實際面から分析し、大体富農的地主、中農、貧農、無産者の四階層に区分し、更に寄生地主層を富農的地主に加えている。そしてこの分化の状態は、会津領ばかりでなく他の幕藩領にもみられることは推察に難くないと断言していられる。そしてそこには、労働力を賣うものと売るものとの存在がみられ、一は経営の

拡大に、他にその縮少に向うことがはっきり現われており、更にこれ等の両極の分解と共に中農層と地主層との存在をみているのである。かくて領主側が本百姓として捉えた農民といつても、農村内部には以上のような分化が存在していることを著者は「地下強弱調」によって実証的に追求を行っている。そもそも幕末における農民層の分化の捉え方には色々な立場から種々な方法によって行われているのであるが、著者がその土地所有と経営規模との分布の実際から明確に区分された点は至当であると考られるのみならず、経済史研究に貴重な示唆を与えるものであると信ずる次第である。

さてこの幕末における農民層の存在形態としての四つの階層はそもそも如何なる時期に、またいかなる経済的条件によって分化したのであるか。幕藩の封建体制が確立し、検地帳に登録された本百姓株の支配が規定された時には、この様な農民層の存在形態でなかつたことは勿論である。著者はこれに対し、まず中農層の経営の一例として、金原田村の農民構成より、中農層の規準を実証的に追及し、その中農層の代表として「菅野八郎」を選び、その経営を貢租部分と作徳部分並びに余剰部分に分け、更にこれを水田、畑作、養蚕の三つに分けてその収支を明らかにしている。労力については雇傭労力と自家労力の配分を行い、雇傭労力の労賃分と自家労

力の労賃分とを区分し、特に自家労力を賃金に換算し、全生産費を明らかにすることによって、商品生産と貨幣経済の発展や資本家的経営又は地主の形成といった事実を封建領主が農民の余剰部分を悉く吸収する事が不可能となったこと、即ち本百姓の手許に封建地代を支払った後にどんな形にしろ超過部分を生み出し得るようになったことから証明している。したがって又労働力再生産の変化が行われるようになったからこそ四階層に農民層が分化したと見ているのである。農民層分化の所以を漠然としか分析し得なかつた筆者にとつて著者の正鵠を得た分析方法は正に一大警醒であり、他の類書に比して、たしかに一の創見を示されたものと云つてよいであらう。次に富農的地主の代表として「山口弥市家」の経営について、豊富な資料を見事に駆使して、水田と畑作による経営の状態を細かに分析し、更に手工業的な面は原料生産を行っていることより商業的農業の展開を見ている。そして特徴的なことは農業專業化に伴い雇傭労働力に漸次切りかえられ、賃労働への移行が進展していること、しかも一卒に賃金形態に推転するのではなくして「ゆい手間」、「日雇」の混合労働力の下に行われるものであること、更にこの経営は小作人を伴うものであり、一面非常に生産力的な面をもつていて專業化への傾向をみせているが、他面経営の拡大方向へ向わずして地主的方向への危険性を内包しているよ

うにみえると述べている。即ち三町歩経営のみについていえば富農的な存在を示しているが、この経営面積の限界を超える経営拡大でなくして爾余を小作地に出しているのであり、その出すところに問題がありはしないかと思われると結んでいる。此の点、著者は折角問題の核心に触れながらその解明が行われていない点は残念に思う。しかし著者があくまで科学的態度を持し、歴史の動きを發展史的見地に立って考察されていることは敬服する次第である。

二

以上は富農的経営の例として、自家労働力と他人労働力をもって経営し、それ以上の土地をもった場合に小作に出すといった自作地主の場合について述べたのであるが、ついで自家労働と他人労働とをもって、自耕地から余剰を得ているが、むしろ商業高利貸資本によって土地集積をはかり、小作料に依存するという寄生地主的経営について論及している。

即ち寄生地主への変化の仕方は一挙に小作人を形成せしめるのではなくして、質地又は前貸の形態で漸次切りかえられていくものであり、寄生地主・小作というときは小作人が地主・領主への地代支払負担をしてもなお一家をとまかく支えてゆることが出来る程に生産力が落達した時に初めて可能となるのであって、それまでは前貸の質地小作的な形で行われてい

ると結論している。換言すれば寄生地主は商業高利貸の強靱な地盤の上に立っていて一挙に寄生化への途を迎ることなく、可能な限り低位生産状態の中に喰い入って土地の集積が続けているのである。そして手作経営から土地集積を通じて経営の拡大を行い資本家的経営に移行するのでなくして直ちに小作経営に移行する寄生地主の型が打出されているのであるとするのであって、かかる見解は近畿地帯における郷富商の寄生地主化の形態にもそのままあてはまるものである。この点まことに興味深い感がする。著者は麻における商業的農業の發展によって貢租徴取の仕法としての土地割換制度は商業及高利貸資本によって名目的なものに漸次変りつつあったこと、又割換制度という最も封建的な特殊な土地制度の中から金納小作料への移行という様相が出て来たことも商業的農業ともいへべき麻の生産に多くの原因があったことを明らかにしている。即ち農民の生活が冷害と伊奈川の洪水に見舞われながら上納金、買米金、塩代、木棉物買入、日用品代等に要する現金収入源を唯一の麻、養蚕に依存しなければならなかったことと、しかもこのような生産形態に吸着している商業高利貸資本についての実例として「青柳村」の「A家」、「白沢村」の「B家」、「古町村」の「C家」、「宮沢村」の「D家」をあげ、その商業高利貸を業として土地の集積を行って

いる事実及び更に高利貸資本の蓄積と共に商業利潤によって貨幣の獲得を行い、農民が商人化してゆく過程、市場とのつながり等について実証的研究を行っている。農民は質地取りと同時に商業を経営し、特に土産物の麻、苧、伊北布、絹糸の販売を行っていること、そして農民はこのような手工業品生産によって現金を生み出し、しかも借金の返済物にしなればならなかった事実を明らかにしている。これ等は又近畿山城地帯における農民が商業的農業ともいふべき菜種の生産によって現金を作り、もって高額地代取奪と桂川、淀川等の水害との挾撃による借金の支払いと窮迫せる生活にあてたる事実とは全く軌を一にしているところである。更にこのような生産性とそのような構造を維持し、吸着している商業資本——買占の資本と高利貸資本——が農民の窮乏と土地の喪失を深め、しかもこの様な典型的な商業高利貸資本の下に農民層は地主——小作関係に分化し、徳川初期、中期とは様相を異にした幕末農村の社会構成を生み出すに至る過程についても、前記山城地帯と同様であって、殊に乙訓郡神足村「油屋弥兵衛」及び「質屋三郎兵衛」両家を中心とする商業高利貸本の場合と同じである。これ著者の事例が東北の後進地帯と考えられるにもかかわらず、京阪両都間にあって比較の早くから貨幣経済に接触して近世経済社会の先進地帯と考

えられる畿内山城における場合とその軌を一にしている事実は日本の近世経済社会研究の上に興味深い問題を提供するのではあるまいか。(拙稿立命館経済学第一巻第五・六号、近世における畿内在郷商人の高利貸資本について、同上、第二巻第一号、近世山城における在郷商人の商業経営、同上、第三巻、封建体制崩壊に関する一考察、立命館大学人文科学研究所紀要第二巻、近世在郷商人の利貸形態を参照されたい)著者は更にこの農民層の地主对小作関係の階級分化から貧農層と上層との階級対立が尖鋭化し、ついに明治元年全會津を席捲した世直し一揆の貧農運動が展開されたのであるとの見方は、如何にも、その行論の巧妙なる事に敬服すると共に、その史眼の明敏且つ正鵠さに驚かされる次第である。

三

次に著者は一般地主的土地所有の成立について述べている。そして小作についても自小作が支配的である場合、どのようにして小作が制度化していったかを追求しているのである。即ち封建的土地所有が否定され、質地、低当、流地、無尽等の事例から土地の集中過程を解明している。殊に一村連帯或は金主と借人のいずれもが連帯になっている連帯貸借の事例は興味深いものである。更に土地の異動や所有状態が事実上農民の手にうつっており、農民の手によって村内の土地の出入関

係が精算され、検地帳付の石高所持記載農民当時とは時代的にも農民層自体についても恐ろしく事情の異つた事実を明らかにし、そこから地主——小作関係を明確ならしめていのである。即ち第一に小作人の類型としては、純然たる小作人と、質地小作等の債務関係から生じた小作人は自小作の程度と推測されること、第二に小作料は物納より金納が多く、勿論畑作地や特に桑園地ということからこのように發展したと見られること。予測であるが借地経営的小作人も考えられること。第三に小作人同志の連盟組織を予測し得ること。これと、そしてその收受関係は領主と本百姓の收受関係と類似的な機構になっている——封建的土地所有の規制の下に、質地、流地等の前期的資本のあくどい収奪の仕方でじりじりと小作化して来る。しかも小作料納入は個々の小作人を対象とせず、次第に小作人全体を対象とし連帯責任を強化して来る——このような小作人の連帯的納入責任の強化は幕末に至つてその萌芽をみせるに至っていると述べ、事例をあげて小作制度が共同体的な連帯責任の下に確立されていることを立証しているのである。これは地主の所得が年貢の増徴に対して厘毛も損ずることなく、小作人に転嫁される仕組になっているのであり、又領主本百姓間の封建的土地所有にとってかわ

る地主・小作の土地制度への変質が行われていく過程であろう。しかしこのような分析は、著者の如く微に入り細を穿つ者にして初めて為しうる処であり、最も資料に忠実な發展過程を描いたものとして、独自の地歩を占めるものであろう。

四

かく論述し来つて著者はつぎに農村工業経営の諸類型について考察を加えている。

著者が農村工業経営の事例として取扱うところのものは専ら平絹織物、蚕種製造並に製糸業の三種の農村工業についてである。即ち信達両郡地方に展開したこれらの工業経営組織の変化とこれに伴う労働形態及び賃金支払形態の分析について、実に微に入り、細に亘つて詳細な実証研究がなされている。まず信達二地方における幕末の生糸生産並びに生産者の状態は、新田畑、或は山谷又は不熟の畑等へ桑を植え、家業として経営し、婦女子の手で生糸、絹織物、真綿、袖類を生産し、生活している有様である。そして生産工程としては誰の手で、どのような組織の上に生産されたものであるかについても考察を加え、一は養蚕から製糸まで行う広汎な養蚕製糸農家の存在、二は養蚕から取調まで行う農家の存在と二つのタイプを見、更に本百姓の養蚕経営には広汎な自家労力を土台とする製糸家と、このような自家労力と他人労働を加えた製

糸家の存在の上に生糸が生産され、商品化されたのであるが、製糸を行わず、繭の販売者の出現と繭繭による製糸及び経営者の出現をみるに至ったことを明らかにしている。ついで製糸業における経営状態については一、養蚕、製糸の一貫性をもった商品生産が広汎に土地と結合して普及して、しかも遠隔地市場を相手に行われ、商業資本の媒介を必然としながらも独立性を保持していること、問屋制資本の技術上の指導も養蚕製糸未分化の上に行われたのであること、そしてこのような生産条件をもつところでは製糸工場の創設は不可能で、明治十年代に入って始めて家内労働を中心とする小器械の製糸が行われること。二、養蚕製糸の独立経営は問屋買占め資本を媒介としながらも問屋資本は彼等を賃挽製糸業者たらしめることが出来ず、技術改善によって生産者を商業資本の下に存続させるといふ方向と、問屋資本は繭購入者としても出現し、農村の分化から生じた賃挽者に吸着するといふ形をとること。三、一方賃挽業者の内には委託製糸やその下請賃挽者が存在し、問屋と絹織物業の賃挽製糸を行うものが存在し、問屋制資本の典型的条件を示していることを明らかにしている。

以上の如き三経営状態から著者は幕末の製糸業者は自家製糸と賃挽製糸が支配的で、前期的色彩が強く、独立化して工

場への推転は困難であったことをしてこのことは商業資本が久しい年月に亘って支配しつづけたためであると結論づけられている。次に著者は蚕種業、平絹織物業経営の組織について攻究を進め、次の如く要約している。

一、蚕種業の專業化に伴い、業者の仲間組織が出来上り、「本場」と「場脇」生産が行われたこと。二、商品は遠隔地商人に直取引で、しかも予約生産であること、更に村内週辺の市場と広汎な養蚕家を相手とする直取引や販売であること。三、彼等の経営には種製造によって生ずる粗品、たとえば繭繭、出敷繭等を賃真綿として出していると共に大桑園の余り糸は周辺に養蚕家に売糸していること。四、更に彼等のうちには桑園及び水田を小作させ又は周辺の貧農を彼等の経営に隷屬させていること。そしてその労働形態は、資本家の経営に移行して多数の労働力を雇用して、(イ)僅小な年傭労力と、(ロ)三季雇傭のしかも移動労力と、(ハ)村内外の日雇労働で行われていること等より蚕種生産に雇傭される労働力は既に土地喪失の貧農プロレタリアによって補給され、労働力の集中と協業の状態を示していること。日雇や鉢頭の土着農業労働者と、常傭に代表される移動労働者の賃金が日額賃金への変化を求めたし近化的様相を帯びるに至っていること。そして労働者は何れも零細片の土地所有者の半プロレタリアであって、まだ

多かれ少かれ、生産用具の所持者であることから完全な労働力の商品化の段階に達していないとみてゐるのである。

つづいて幕末この地方に展開した農村における絹織物工業の経営組織はどのようなものであったかについて、信達郡立子山村における天明二年の宝槻家の経営をとりあげ、彼の経営は自家用の余剰部分を市場に商品として出す単純な段階のものではなく、下僕と共に働き家族労働の協業を越えて行われており、又伊達郡大久保の古閑家の経営をあげ、その水田と養蚕と織物との組合せ経営を分析し、雇人の労力を切りはなしては成立たない段階まで経営組織が進展している状態を明らかにし、次の如く要約している。

一、自給又は購入原料による生産、それは家族労力と雇人労力によって農工を結合した経営がみられる。二、一個人にして二十数人の賃織者を抱えている間屋が存在していること。そして更にこれらの二つの経営から、そこにマニユファクチュアへ推転している事実と間屋制の存在がみられるのであって、幕末、明治初年に展開したこの地方における絹織物の経営組織を土地所有規模からみ、その経営形態からして(一)、マニユファクチュア、(二)、間屋経営、(三)、小商品生産者の三つの農民層が存在したとしている。そしてこの(一)と(三)の場合のように、その経営には雇人と賃織者が隷属し、身分的にはお封建的なものが強く覆いかぶさっているが賃銭計算による支払方法が採用されていたと結辭している。

以上著者の農村工業の諸類型としてとりあげた製糸工業、蚕種製造工場、平絹織物工業についてその要点を紹介したわけであるが、これ等工業の経営形態ならびに労働形態を比較検討するならばおのずから幕末における農村工業の存在形態がどのようなものであったかを明確に把握することが出来る。これ全く著者のもつ豊富な資料の賜であると共に、著者の克明な研究の結果に外ならぬものであると信ずる。

五

要するに本書は著者がその序文の中で「ここで、私自身についていえば、経済史に関する実証的追及をおぼえてから二十五年・六年にもなる。一片の古文書にしがみついて、たどたどしくもよめるようになり、書かれてある内容を自分の手によって分析し解決しようと取りかかってから早くもこの永い年月が流れたわけである。」と述べ又「原資料はわずらわしい程載せてある。これは従来古文書の実証が必要箇所のみ収録されたきらいがあったのをさけるためと、血の出るような蒐集で捨てられないということのためである」と述べている如く、全く著者の長年月にわたる研究の成果であり、血の出るような懸命の努力の結晶に外ならないものである。それだけに本書は経済史研究の上に言いしれぬ数多くの指導と示唆を与えていよいよその光彩を放つことであらう。